



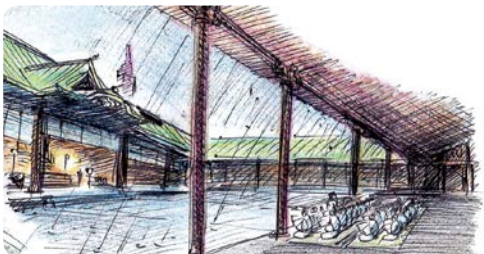
# 神道文化学部の四季





神道文化学部 開設15周年記念フォトアルバム

# 神道文化学部の四季



# ご挨拶

中今のとき

学長 赤井 益久

國學院大學に「神道文化学部」が置かれて十五年を閲した。本学創立百二十周年記念事業の一環として構想され、二年の準備を経て認可申請の後、皇典講究所以来の宿願であった「神道文化学部」は、平成十四年に設置が認められた。当時の学長は、阿部美哉前々学長、初代学部長は安蘇谷正彦前学長であった。神道精神を建学の理念と位置付け、その現代的意義付け、伝統の継承と新たな価値の創造、研究と教育の国際化と現代化、広く宗教学から見た神道の価値と意義、などが設置の趣旨として標榜された。その後、有為な人材を輩出すると同時に、建学の精神や神道精神を全学の学生に教育する神道科目の充実、21世紀COEプログラムやORC整備事業などの主要な担い手として学術成果の発信および拠点形成、観月祭や加冠式などの伝統行事を今に伝える事業を通して、文字通りの看板学部としての役割を果たし、大学に貢献してきた。

今後は、学部としての使命を自覚し、競争力を強め、教育の内部質保証を確かなものとし、建学の精神をよりいっそう教育に生かすべくさまざまな工夫と努力をしなければならない。この記念すべき年を「中今のとき」と認識し、また神道世界における知の拠点として、学術成果の社会的貢献や発信を通し、斯界の求める人材の育成に努めることによって更なる飛躍を念願している。



## 神道文化学部開設十五周年を迎えて

神道文化学部長 武田 秀章

おかげさまをもちまして、神道文化学部は無事開設十五周年の節目を迎えることができました。まことに感無量の思いを禁じ得ません。

そもそも神道文化学部は「祭りの学部」です。四季折々、この学部ならではの年中行事が古式ゆかしく行われています。大切なことは、そうした行事が、教職員のみならず、広く学生たちを担い手として行われていることではないでしょうか。わが学部の代表的な行事、観月祭や成人加冠式では、学生諸君の力が自ずから結集します。あたかも『古事記』に言う「八十伴緒」の連携と協力が、如実に具現されるかのようなようです。

神道文化学部では、こうした学部の特色に鑑み、十五周年の節目に際して、本記念誌『神道文化学部の四季』を刊行する運びと相成りました。『神道文化学部の四季』は、わが学部ならではの「歳時記」であり、また「年中行事絵巻」でもあります。とりわけ卒業生の二宮昌世さんが在学中制作した「観月祭絵図」「成人加冠式絵図」を収録することができたのは、大きな喜びと言わなければなりません。

顧みれば、学部発足以来、数多の卒業生が全国の神社に羽搏いていきました。これからも教職員一同、力を併せて神職養成に励み、次代の神社の担い手を育てていきたいものと念願しています。どうか引き続きご支援、ご協力のほど、衷心よりお願い申し上げます。



## 神道文化学部の四季 ● 目次

ご挨拶 2

目次 4

教員メッセージ 6

【入学】 12

● 入学式……………12

● アイスブレイク……………14

【授業】 16

● 神道文化基礎演習（二年次）……………16

● 神道文化演習（二年次）……………18

● 基幹演習 神道学演習Ⅰ・Ⅱ（三・四年次）……………20

● 神社祭祀演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（二～四年次）……………22

● 古典講読Ⅰ（二年次）……………24

● 神道英語（二年次）……………26

● 神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ（二年次）……………28

【実習】 30

● 実習……………30

【祭典・行事】 32

● 神殿……………32

● 宮廷装束の着装披露……………34

● 和装Day……………36

● オープンキャンパス……………38

● 観月祭（一）舞人のメッセージ……………40

● 観月祭（二）バックステージ……………42

● 若木祭の神輿渡御・舞楽奉納……………44

● 大掃除……………46

● 成人加冠式（一）祝辞……………48

● 成人加冠式（二）新成人のメッセージ……………50

● 成人加冠式（三）衣紋方のメッセージ……………52

● 古事記アートコンテスト……………54

【米作り】 56

● 田植え―お米作りワークショップ―……………56

● 稲刈り―田んぼ学校―……………58

【講座】 60

● 御幣講座……………60

● 衣紋講座……………62

● 女子学生のための就職セミナー……………64

【復興支援】 66

● 復興支援活動……………66

● 千度大祓……………68

【国際協力】 70

● Experience! Evening of Japanese Culture  
（日本文化を体験する夕べ）……………70

【卒業】 72

● 卒業生メッセージ……………72

【奉職・就職】 74

● 奉職……………74

【式年遷宮奉祝舞】 76

● 第六十二回神宮式年遷宮  
奉祝舞「河水久澄」披露……………76

【年中行事絵図】 78

年表 90

# 教職員メッセージ

五十音順



【宗教学 宗教社会学】

石井研士 教授 ● 宗教学Ⅰ・Ⅱ

平成十四年度の神道文化学部開設は、それ自体が時代の欲求であったと思います。十五年を経て、時代が大きく変容していくときに、将来を見据えた改革が必要であるように思えます。担当している「宗教学」では、神道や宗教に対する偏見を排除することにも、私たちの生活にとって不可欠な存在であることを訴えてきたつもりですが、今後も責務を果たしていきたいと思っています。

【宗教社会学 認知宗教学】



井上順孝 教授 ● 宗教社会学Ⅰ・Ⅱ など

平成十四年度の神道文化学部創設に際し、日本文化研究所より移籍してきましたが、本年度で退職となります。本学部では十六年の間、講義や演習において多くの学生さんたちと接して、教員としても刺激的な日々を過ごせました。世界や日本が大きく変わる時代にあつて、日本の宗教文化の特徴をより深く学び、外国の人たちとも広い心で接することのできる若い人を輩出することの学部は貴重な存在です。いつその発展を願っております。

【宗教学 日本宗教史】



遠藤潤 准教授 ● 神道思想史Ⅰ・Ⅱ など

平成二十五年度に研究開発推進機構から移籍して以来、今日まで神道文化学部での教育に携わってきました。研究開発推進機構の時代と比べて、圧倒的に学生との接点が増え、忙しくも楽しい日々を送っております。大学教育に対して、学内外から数えきれない課題が課されるなか、目の前の学生ときちんとした形で向き合う教育を深めたいと考えています。

【古代・中世神道史 神社史】



岡田莊司 教授 ● 神道史（専攻科） など

本学入学から半世紀以上を超え、「平成」の終わりとともに定年を迎える。この間、文学部神道学科の専任教員として昭和五十年代から平成の前半まで過ごし、その後、平成の後半は学部教員として、数多くの学生と接してきた。親子二代にわたって教える方々も少なくない。神道の学問は奥が深い。今後とも部神道の当主が神職に与えた言葉「慎みて怠ることなかれ」を実践していくことに努めたい。

【神道祭祀学 神社祭祀】



小野和伸 准教授 ● 神社祭祀演習ⅢB など

いま充実した教育環境の下で勉学に勤しみ、種々の行事に意欲的に参画する学生の姿に触れると、学部開設が果たした役割の大きさを実感します。今日の栄えある態を築いたのは、正に皇典講究所設立以来の輝かしい盤石な基礎の上に立って、地道な努力を積み重ねて来たことによる成果であると確信しています。此度の佳節に際し、学部の更なる発展を念じます。

【古代・中世神道史】



加瀬直弥 准教授 ● 祭祀学Ⅰ・Ⅱ など

神道に関する情報は簡単に入手できる時代になり、従来通りの授業内容では、市井の人々に知識で太刀打ちできない卒業生を多く輩出しかねない状況となった。「神道はこうだから」と強弁する度胸を養うだけでは足元を見透かされてしまう。知識の根柢を確かめながら、裾野を広く知ろうとする姿勢を養う授業を愚直にしていきたい。

【宗教学 宗教と情報】



黒崎浩行 教授 ● 神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ など

平成十四年の学部開設によって新たに開講した「神社ネットワーク論」「神道と情報化社会」などの科目を担当してまいりましたが、十五年が経ち、いまだに試行錯誤していると言っている場合ではなくなりました。またこの間にもさまざまな社会の変化がありました。重い責任を感じつつ、これからも学生とともに研鑽してまいりたいと思います。

【古代神道史 神道古典】



小林宣彦 准教授 ● 神道史学Ⅰなど

神道文化学部の十五周年は、多くの方々々に支えられて積み上げられた歳月の結晶であり、先ずは、日頃より学部の運営・教育などにご協力いただいておりますことに対しまして、衷心より御礼申し上げます。今後も神道文化学部の教員として、研究や教育に対し「慎み」と「不怠」を心がけてまいりたいと思います。

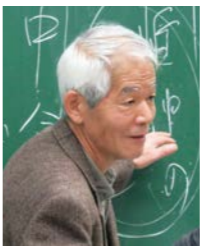
【宗教学 近代神道史】



齊藤智朗 教授 ● 神道史学ⅡA・ⅡBなど

神道文化学部が創設された平成十四年は、日本文化研究所の調査員を務めていました。当時は創立百二十周年とあわせて、長きにわたり本学の宿願であった神道に特化した学部の創設に本学全体が歓喜と活気にあふれました。神道文化学部に着任してまだ三年ですが、本学部のさらなる発展に努めたいと存じます。

【近世・近代神道史 国学】



阪本是丸 教授 ● 神道概論(専攻科)

神道文化学部の開設から十五年。創立百二十周年となる平成十四年度開設を目指し、当時の阿部美哉学長の指揮のもと、申請作業に忙殺されていた日々が走馬灯のように脳裡を過ります。その甲斐あってかどうか、今や、神道文化学部は澁淵とした学生と先生方で溢れ返り、活気が漲っています。命懸けで作った学部の発展ぶりに阿部先生もきつとご満足でしょう。

【日本考古学 日本宗教学】



笹生衛 教授 ● 宗教考古学Ⅰ・Ⅱなど

神道文化学部の教員をつとめ、すでに九年が過ぎようとしています。私は、文化財行政の世界から、母校の教壇という新たな世界へと足を踏み入れました。教育・研究ともに充実していたためか、あっという間の九年間でした。私自身、この学部で多くを学ばせていただきました。今後も、新たな発見ができる教育・研究を心がけ、励みたく思います。

【近代神道史 歴史社会学】



菅浩二 准教授 ● 神道と国際交流Ⅰ・Ⅱなど

世界中にただ一つのわが神道文化学部。その十五周年の節目を、私の様な者が教員として迎えていることに、喜び、恥ずかしさ、責任の重さ等々、様々な思いが駆け巡ります。上田賢治先生の御著を読み、神道の学びを志して以来二十数年。様々な方から頂いた学恩への感謝を持って、学生諸君との歩みを更に進めるべく、努力を重ねたく存じます。

【国学史 神道古典】



武田秀章 教授 ● 古典講読Ⅰなど

十五周年の節目を迎え、頻りに恩師の学恩に思いを馳せる日々です。入学当初、教養科目で受講した上田賢治先生の「神道概説」。思えばあの授業こそが、私の人生を方向付けてくれました。今の私が、先生のような「儒夫」をも起したしめる「授業を展開できて」とは、到底言えません。只々、一学徒として学生諸君と共に学びを深めていきたいと願うばかりです。

【神道思想史 神道神学】



西岡和彦 教授 ● 神道神学Ⅰ・Ⅱなど

本学部開設と共に専任教員に招いて戴きました。そのご恩をお返すために裏方に徹して参りましたが、開設当初の偉い先生方が次々にご退職なされたため、小生が中間管理職のような仕事をする始末になりました。その間、数々の失敗を重ねて参りましたが、クビにならなかったのは、本学部持ち前の神道精神「寛容さのお蔭と感謝致しております。これからはそのご恩をお返するために、ご奉公して参りたいと存じます。

【神道教化論 宗教行政論】



藤本頼生 准教授 ● 神道教化概論Ⅰ・Ⅱなど

平成十四年に産声をあげた本学部が十五周年を迎えることができたのも、皆さま方の支援のおかげであり、心より御礼を申し上げます。神道というものは多面的な価値を持つだけに講じることの難しさを日々感じています。学べば学ぶほど、奥深い神道・神社。これからも弛まぬ研究を基礎に、学生に神道の奥深さをわかりやすく伝えてゆきたいと思えます。

【宗教学 日本宗教史】



ヘイエンズ・ノルマン 教授 ● 世界宗教文化論Ⅰ・Ⅱなど

二〇〇二年、神道文化学部設置により一つの学部から二つの異なる「翼」が生えることになった。一方では神社神道の信仰を奉仕する神職を養成するいわゆる「神学校」の使命とともに、神道その他の宗教の科学的・学問的教育という一般大学の学部使命も負うようになった。外国人としてこの新しい教育環境や試みに参加させていただけた事は非常に光栄であり、一生返せない恩として感じています。

【神道祭祀学 国学】



星野光樹 専任講師 ● 祝詞作文Ⅰ・Ⅱなど

神道学科（当時文学部）に入学してから今日に至るまで、ご指導ご鞭撻をいただいた先生方・先輩方、お世話になった職員の方々とともに、学部教員として学部創設十五周年の佳節をお祝いできることを大変光栄に存じます。自身の責任の重さを自覚し、この学び舎で蒙った多大な学恩に少しでも報いられるよう、謙虚に励んでまいりたいと思います。

【国学史 神道史】



松本久史 教授 ● 古典講読ⅢA・ⅢBなど

学部発足の平成十四年に日本文化研究所の専任教員となり、同年に兼任教員として授業を担当いたしました。つまり大学教員としてのキャリアと同じ年月が経ったということで、感慨もひとしおです。学部に移籍してからは、学生さんと直に接する機会も増え、現在も試行錯誤の日々ですが、神道を教えること、神職を養成することの使命を果たしたいと思っています。

【民俗芸能学 社叢学】



茂木栄 教授 ● 日本宗教文化論Ⅰ・Ⅱなど

学部開設当初の思い出を語ります。最初の「神道文化学部ガイドブック」の作成を担当したのが私です。学生の学びのガイドとなる冊子をどう作るか。お手本がなかったので相当悩みました。阪本先生からもアドバイスやデータをいただいで、「ガイドブックは二年目からがいい」という意見もありましたが、学部開設時に発刊することができました。表紙は安蘇谷学部長が選んだ風景カラー写真。中はモノクロでした。二年目からはオールカラー、表紙写真はヘイヴンズ先生の撮影、今日まで毎年度新たに提供して下さっております。

【神道祭祀学 戦後神道史】



茂木貞純 教授 ● 神社祭祀演習ⅢBなど

平成十七年四月から母校の教壇に立ち、祭作法法を中心に講義や指導を行なってきました。祭式は神職にとって必要不可欠で生涯修練しなければならないことで、責任の重大さを再認識しています。よき神職を養成することが神道文化学部の使命です。大学での学びの日々で、その魂が形成されることを、祈ること切であります。



堀口裕美子 資料室員

昭和五十六年、本学八十九期生として日本文学科を卒業、文学部資料室員として奉職。平成二十一年四月から神道文化学部の資料室勤務。学生時代から含めると四十年の長きに亘って國學院大學で過ごしたことになります。創立百二十周年記念事業のあり、『新編荷田春満全集』の刊行に携われたことは幸せなことでした。今また、学部の佳節に立ち会えた喜びを感じております。本学部が神道界の発展に寄与することを願ってやみません。

# 入学

## 入学式誓詞（抄）

小山 侑香さん 「神道文化学部一年生」

春風が心地よいこの季節、私たち新入生は國學院大學の学生として、新たな道を歩み始めようとしています。

私が神道に興味を持ったきっかけは、伊勢神宮に参詣したことにあります。初めて神宮に詣でたのは私が中学生の時、ちょうど式年遷宮が行われる年でした。内宮の鳥居をくぐった瞬間に感じたピリッとした空気や澄んだ川の水、境内の木々から伝わってくるパワーはいまでも覚えています。また、外宮の美術館で、緻密に作られた馬具や唯一神明造りの大きな神殿の模型、繊細な織物を見た時にはこの伝統技術の継承の大切さや、古くから伝わる日本人の神様、とりわけ天照大御神への畏敬の念の深さを感じました。

私はこれらの経験を通して、日本人の心の形成は、天皇や神社と深く結びついているのではないかと考えました。また、神道を学ぶことで、海外の方との接し方も変わってくるのではないかと思っています。

私には、まだはつきりした将来の夢はありませんが、幼い頃から日本舞踊を習っており、本学で学んだことと、踊りを活かして、海外の人に日本を知ってもらおうような場を持つてみたいと考えています。

これから始まる大学生活を充実したものにすべく、沢山のひととの出会いを大切に、語り合い、自分自身を見つめ、たくさんの経験を糧に成長できるように努力することをお約束とし、誓いの言葉といたします。





## ❀ アイスブレイクで友達作り

藤山 廣諭さん 「神道文化学部二年生」

私の実家は北海道の神社です。私はどちらかと言えば人見知りの性格なので、東京での大学生活に馴染めるか、不安を抱えての入学でした。けれども、その不安は、入学時、前後二回にわたって行われた神道文化学部のオリエンテーション行事「アイスブレイク」によって、すっかり解消されました。「アイスブレイク」では、全国から集まった学友たちと、共同のワークや散策で懇親を深めることができます。「アイスブレイク」を経て、私たちは「学びの仲間」として打ち解けることができました。おかげさまで、かけがえのない友人もできました。とりわけ九州出身、四国出身の友人と意気投合しています。いずれも私と同じ神社のあと継ぎの立場で、いろいろな話を話し合い、相談しあっています。この交流は、これから一生続いていくことになるだろうと思っています。

ふるさとでは、私のことを大勢の方が待っていてくださいます。その期待に応えられるよう、しっかりと学んでいきたいものと願っています。



# 授業

## 神道文化基礎演習（二年次）

### ❀ グループワークで基礎学力を培う

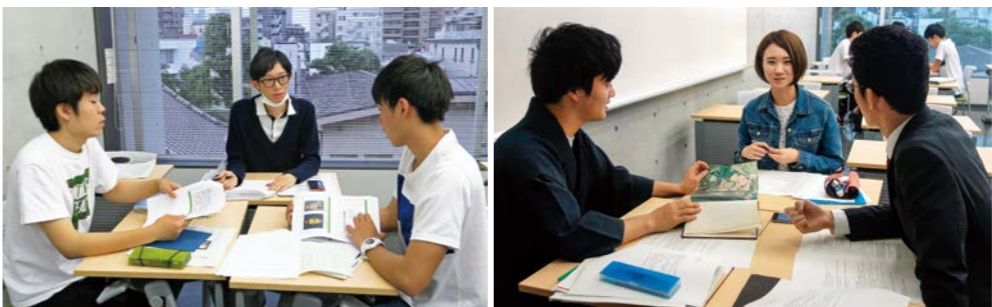
吉田 絢香さん 「神道文化学部一年生」

神道文化学部では、一年次から四年次まで、一貫して少人数の演習（ゼミナール）が行われています。入学者が最初に受講する入門演習が、「神道文化基礎演習」です。

「神道文化基礎演習」では、まず読み書き等の基礎学力をしっかりと培います。ついで各自の「最初の研究発表」に向けて、レポートの書き方やレジュメの作り方、発表の構成などの基礎を学びます。さらに何回もグループワークを重ね、各々の発表内容を一緒に練り上げていきます。

私は「神道文化基礎演習」の学修を通じて、大学四年間の学びの土台を作り上げることができました。知らないことが多ければ多いほど、神道文化学部の学びによって、目から鱗を落とす機会が多くなります。必ずや「世界の中の日本」を、新たに再発見することができるでしょう。このことは、社会に出た際、「神道文化学部出身者ならではの強み」に繋がってゆくことになると思います。

日本の精神文化を次代に伝えることができるような社会人となるよう、日々努めていきたいと願っています。



# 神道文化演習（二年次）

## ✿ 現任神職のご講話を聴いて

谷野 智重さん 「神道文化学部三年生」

神道文化学部の二年次科目「神道文化演習」では、例年、現任神職をお招きしてご講話を聴講しています。今回、私たちは、由緒あるお宮の宮司さまから懇切なご講話を頂戴いたしました。

ご講話の内容は、神職の聖職的な側面・経営者の側面、その両面からのお話で、大変興味深く、将来への糧になりました。

参拝者は、会計の正確さ・対応の速さなどのサービス業的な面を求めています。神社をお預かりする宮司は、神と人との仲執り持ちでありながら、神社の経営も考えねばならない大変厳しい職業です。

時代の慌ただしい変化の中で古来の伝統を受け継いでいくのは、決して簡単なことではありません。この問題は、将来神職を目指す者が、避けて通れない問題です。信仰と歴史を尊びながら、その上で時代にマッチした神社経営が出来る神職を目指して、さらに研鑽を重ねていきたいものと願っています。



# 基幹演習

# 神道学演習Ⅰ・Ⅱ

(三・四年次)

❀ 専門ゼミで自分の研究テーマに取り組みました

戸内 結律子さん 「神道文化学部第二二期卒」

神道文化学部のカリキュラムは、少人数の演習が軸となっています。とりわけ三・四年次は、専門のゼミ（基幹演習科目）で、お互いに切磋琢磨します。

私は藤本頼生先生のゼミで「御朱印ブーム」の実態について調べました。人々が神社に足を運ぶきっかけとして、「御朱印」は大きな役割を果たしています。「御朱印」が繋ぐ神社と参拝者の絆、「御朱印」が求められる社会的背景についても、自分なりに考察を巡らしました。

藤本先生は、一人一人の発表に、それは親身なご助言をしてくださいました。私たち学生のことを真摯に考えてくださっていることが、ひしひしと伝わって参りました。ゼミの仲間たちの発表を聴くことも、とても勉強になりました。私も頑張らなければ、という気持ちになることばかりでした。

藤本ゼミで学んだことを活かし、これからも神道のことを多くの方々に伝えていきたいと思っています。



## 神社祭祀演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（二～四年次）

※ 祭祀作法を学んでいると、

自分が神職を目指していることを実感します

永井 承吾さん 「神道文化学部四年生」

私は北海道の社家の長男です。当初、神社を継ぐことには、抵抗がありました。けれども、父が懸命に奉仕する姿を見て、自分もしっかりしなければ、という気持ちになりました。私は自分の意志で、神道文化学部への進学を決めたのです。

学部学びでは、とりわけ祭祀の授業に熱心に取り組んできました。父は、祭祀に関して、「大学でしっかりしたものを教われ」というタイプでした。いま作法や次第を学んでいると、自分が神職を目指していることを実感します。

祭祀教室での授業はとてますが、いつも心が引き締まる思いです。仲間たちとのチームワーク、助け合いで、着実に時処位に応じた作法が身につけてきたように思います。

先般、おかげさまで都内の名社から奉職内定をいただくことができました。卒業まであとわずかですが、大学で学んだ祭祀作法をもう一度しっかりとおさらいし、四月からのご奉仕に備えたいと思います。



# 古典講読Ⅰ（一年次）

❀ 『古事記』の語り部を目指せ！

吉田 光臣さん 「神道文化学部第二二期卒」

一年次「古典講読Ⅰ」は、『古事記』講読の授業です。授業では、本文講読はもちろんのこと、受講生による「語り部」の実践や、『古事記』アートの制作等々、『古事記』を現代に活かす手立てを探求しています。

私が大学に入学して一番衝撃を受けたのが、そんな武田秀章先生の「古典講読Ⅰ」の授業でした。大学に入学するまで、私の中での古典のイメージというのは、文法や単語の訳を覚えるようなとても退屈なものでした。しかしこの講義を受けたことよって、その日から私の古典に対するイメージが変わりました。先生による生き生きとした『古事記』の語りを毎週聞くうちに、私は日本神話の底知れぬ奥深さに引き込まれていったのです。

神道を学ぶ上で避けては通れないのが、この『古事記』です。その『古事記』を、誰にでもわかりやすく、親しみやすく、感じる。ことが出来るのが「古典講読Ⅰ」の授業です。神道文化学部での学びを糧として、氏子崇敬者の方々に『古事記』の素晴らしさを少しでも伝えられるよう努力していきたいと思っています。



# 神道英語(二年次)

— 英語 V・VI —

❁ 英語は君たちの武器なのだ!

菅浩二 「神道文化学部准教授」



「神道英語」は神道文化学部ならではのユニークな科目です。そもそも「神道英語」は体育の授業です。みなさんの「唇と舌と声帯」を徹底して鍛えます。もちろん居眠り禁止。体育の授業で、居眠りできるわけがありません。

この授業は、演劇の授業でもあります。皆さんはドラマを演ずる役者です。舞台で役を演ずるように、エモーショナルに言葉を交わしあってもらいたい。

日本人は、なぜ英語が苦手なのでしょう。ひとつには、日本語と英語の言語構造が余りにも違っているからです。日本語は語幹に接辞を繋ぐ膠着語。動詞の位置も語順も、欧米語や漢語などの言語とは大きく異なっています。

しかしながら、明治の先人は、英語の名手揃いでした。彼らは、漢文訓読の要領で英語を学んだのです。われわれの父祖は、西洋文明導入のツールとして英語を学びました。英語の発想や概念を、日本語の内懐に組み入れて、未曾有のグローバル化に立ち向かおうとしたのです。

目下、英語は、世界中で多民族間・多  
人種間の共用語として使い倒されていま  
す。もはや英語は、英米人の言語ではあ  
りません。

皆さん、グローバル化の只中、明治先  
人の叡智を受け継ぎ、武器としての英語  
をしっかりと学んでいきましょう!



## 神社ネットワーク論Ⅰ・Ⅱ（二年次）

❀ これからの神社の役割を皆で考えました

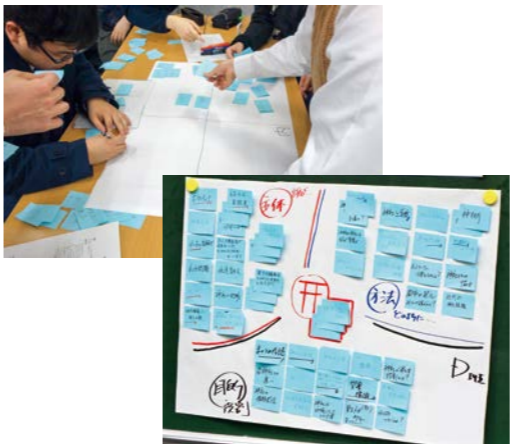
丹川 葵さん 「神道文化学部三年生」

二年次、黒崎浩行先生の「神社ネットワーク論」を受講しました。「神社ネットワーク論」は、これからの神社界を、ネットワークという視点から考えていく授業です。この授業では、地元の神社を盛り立てていくためのアイデアや戦略を、皆で一緒に練り上げていきます。

グループワークでは、他の学生と意見交換したり、自分の調べたことを発表したりしました。境遇を同じくする人の発表に共感したり、自分とは異なる環境にある人の発表から多くの事を学んだり。おかげさまで、自分の視野がとても広がったように思います。

「自分のお宮だけではない、全国の神社が力を併せて困難な時代を乗り越えなければならぬ！」そんな思いに勇気付けられながら、毎回の授業に臨みました。

この授業の履修を通して、三年次の演習での研究テーマも決まりました。「神社ネットワーク論」で考えたこと、感じたことを、卒業後の御奉仕の中で、ぜひとも活かしていきたいと思っています。





# 実習

❀ かけがえのない経験

押田 美沙紀さん

〔神道文化学部第一二三期卒〕

神職課程履修に伴う「神社実習」「神宮実習」は、私にとって、実にかけてがない経験になりました。

二年次は明治神宮で実習が行われました。とても都内とは思えない、あの森厳とした環境。夜間、大前での大祓詞奏上は、とりわけ感銘深い体験でした。

三年次は、山形県の出羽三山神社で実習させていただきました。出羽のお山の神々しかったこと！大自然の山懐に抱かれながら、仲間たちと充実の日々を過ごすことができました。

四年次は、「明階総合課程」の履修に伴い、伊勢の神宮での実習がありました。『古事記』の神話そのままの神宮の佇まいは、あまりにも感動的でした。五十鈴川での禊や、早朝参拝のすがすがしさも忘れることができません。

おかげさまをもちまして、卒業後は、地元の名社で女性神職としてご奉仕させていただきます。これからも神道文化学部での学修を糧としつつ、御社頭のお務めに勤しんで参る所存です。



明治神宮「指定実習Ⅰ（第三期）」

（二年次、平成二十九年次）

「ミニ献詠歌会」詠草より

若人ら代々木の杜に集ひ来て 明治のをしへ 学ぶ日は来ぬ（学部長）

身を清め 友らと共に 立ち並び 決意固めて 祈る大前（男子）

目に見えぬ 神に仕ふる 身となりて まことの 心常に 捧げむ（女子）

集ひ来て 神の大前力 受け 未来へ つなぐ 志立てむ（男子）

いにしへの 心伝ふる ふみなれば 学びて 語れ 四方の 海まで（女子）

高き壁 そびえて 見ゆる 目の前に 乗り越て 行かむ 強き心で（男子）

いにしへの 路をたどりし わが心 ただ 正直に 神に 祈らむ（女子）

荒波を 乗り越来る 明治人 われら 子孫の さまはいかにと（男子）

志同じ 我らが 集ひし 日 代々木の 空に 精進誓ふ（女子）

大空に 響くは 子らと 虫の 声 神のご 加護に 今日も 感謝を（女子）

神祭り 千歳につづく み手ぶりを うけつぎ 行かむ 千代に 八千代に（女子）



# 「祭典・行事」

## 神殿

❀ 大学神殿の祭典に御奉仕させていただいて

椿拓磨さん 「神道文化学部四年生」

渋谷キャンパスの神殿は、本学「建学の精神」の象徴です。私は瑞玉會の会員として、四年間にわたって大学神殿の祭典に御奉仕させていただきました。あらためてこの四年間を振り返ると、本当に素晴らしい経験を積ませていただくことができた、心から感謝しております。

神社とは関係の無い家庭で育った私は、大学へ入るまで、祭典奉仕は勿論の事、祭典参列の経験さえあまり無く、文字通り右も左も分からない状態でした。入学から約一ヶ月後、はじめての祭典奉仕では、初めて耳にする言葉や祭器具の扱い方に、右往左往したのを覚えています。

時が経ち、多くの祭典を経験してゆくにつれ、自然と祭典に関する技術や知識が向上して参りました。それと同時に、神明奉仕にあたっての心構えや姿勢も、しっかりと身に付いてきたように思います。

私は来春より神職として御奉仕させていただくこととなりました。学生時代、本学「建学の精神」の象徴たる神殿において、神明奉仕のこころを磨く機会をいただけたのは、本当に有難いことだった実感しています。

大学神殿における祭典奉仕で培われた精神や技術を大切に守り、卒業後も神明奉仕に精進して参る所存です。



# 宮廷装束の着装披露

## ❀ 宮廷文化の重さ

春田 華奈さん 「神道文化学部第二二期卒」

在学中、祭式教室で「宮廷装束の着装披露」（霞会館衣紋道研究会・神道文化学部共催）が行われました。私は女房装束（五衣・唐衣・裳）の御方を務めさせていただきました。

古来の礼装を身に纏わせていただき、まことに心身共に引き締まる思いがいたしました。一枚ずつ羽織ることに、少しづつ重みが増していきましたが、その重さこそが、日本の宮廷文化の重さなのだと思感させていただきました。

いにしえの着装の技術が現在まで受け継がれてきたのは、衣紋道研究会の皆様方の日々の研鑽があったこそだと思います。素晴らしい着装を賜りました衣紋者の方々に、心より御礼申し上げます。



# 和装Day

一昨年から始まった本学の「和装Day」。  
七月七日・七夕の日、多数の教員・学生が、「和の装い」  
で一日を過ごします。

神道文化学部の学生たちは、短冊に願いを込めたのち、  
神殿に参拝、まごころを捧げていました。

「和の装いが大好きです。和装のサークルに入って楽  
しんでいます」（学生の声）。

本学ならではの風流、「和装Day」。

「日本の夏」を体感した一日でした。

皆さん、星に願いは届いたでしょうか？



# オープンキャンパス

## ※ 神道文化学部ならではの体験授業

多数の来場者をお迎えする本学のオープンキャンパス。

神道文化学部では、この学部ならではの趣向を凝らして来場者を「おもてなし」します。

六月のオープンキャンパスの体験授業は「雅楽と舞に親しむ」。

まずは学部学生が「豊栄の舞」を模範披露。

「いま私たちが舞った「豊栄の舞」。さあ、皆さんも舞ってみましょう！」

まさかの無茶振りを受けて立ち、「はじめての神楽舞」にチャレンジ。

一同、はじめてとは思えぬ手捌き、足捌き。ご父兄も熱心に見守りました。

八月のオープンキャンパスの体験授業は「神職の装束を体験する」。

伝統の装束を身に纏い、みやびの心を肌で感じていただきました。

恒例の交流タイムでは、そこかしこで和やかな懇談が。

「國學院ならではの伝統文化の息吹を、肌で感じることができました」（来場者の声）。

わが学部ならではの「おもてなし」の方途とは？

これからも学生諸君と共に考えていきたいと思っています。



## 観月祭(二) 舞人のメッセーじ

❀ お客さま方の熱心なご観覧が  
力となって

吉田 理央さん 「神道文化学部三年生」

昨年に引き続き、本年もまた舞人として十月の観月祭にご奉仕させていただきました。前回は祭祀舞でしたが、今回は舞楽「迦陵頻かりょうびん」の舞人を務めさせていただきましたこととなりました。

何分、舞楽は全くの未経験です。足の運び、拍の取り方、体重移動など、一から覚えなければならぬことが数多くありました。本日に当日まで舞を完成させることができるのか、常に不安を抱えながらのお稽古でした。

けれども当日、本番を迎えるや、お客さま方の熱心なご観覧が力となって、ともかくも精一杯の舞を披露することができたと思っています。

顧みれば、この間、多くの方々のお力添えを賜りました。御指導の諸先生方、共に舞った仲間たち、試行錯誤で舞楽装束の着付けに取り組んでくださった衣紋者の方々…。おかげさまで、終生忘れ難い、貴重な経験をさせていただくことができました。心より御礼申し上げます。

本学恒例の観月祭が、これからも恙無く受け継がれていくことを、心よりお祈り申し上げる次第です。



## 観月祭(二) バックスステージ

❀ 観月祭のバックステージを  
皆で支えました

中村 瑠里さん 「神道文化学部四年生」

私が所属しているサークル若木睦は、観月祭で齋庭係の仕事を担います。齋庭係は、観月祭の裏方で、観月祭の諸準備、観覧者の方々の警備や誘導など、様々な仕事を請け負います。観月祭を前にして、先輩達はいつも次のように仰ってくださいました。

「齋庭係はいわゆる、縁の下の力持ち。地味で目立たないが、なくてはならぬ大切な仕事。それを黙って担うのが、われわれの誇りなんだ…」

そんな先輩方を見習って、後輩たちもまた頼もしく行動しました。観覧者の方々、演者の方々がより快適になるよう、自ら考え、積極的に動いたのです。お祭りは、決して一人ではできません。大切なのは、チームワークと「力になりたい」と思う気持ちです。このことは、お祭りだけにとどまりません。

世の何事についても言えることではないでしょうか。たったひと晩の行事のために、どれだけの時間が費されたのかを考えると、実に感無量の思いです。

例年と同様、今回の観月祭においても、頑張っている仲間たちがたくさんいました。そんな素敵な仲間たちと大きな仕事ができ、とても嬉しく有難く思っています。



# 若木祭の神輿渡御・舞楽奉納

❀ 一年に一度、学生諸君のお祭り

例年十一月の若木祭。一年に一度、学生諸君のお祭りです。

その最終日の呼び物は、恒例の神輿渡御。

午後一時前発御、金王八幡宮で正式参拝ののち、明治通りに繰り出しました。

「國學院の御神輿だ！」道行く人々の注目を集めます。

氷川神社正式参拝を経て、キャンパスに還御。締め括りは、舞楽の奉納。

秋の夕べ、本学ならではの清興。

来場者の皆さま方に、心ゆくまで堪能していただけたのではないのでしょうか。





# 大掃除

## ❀ 祭式教室を清々しくリフレッシュ

一年の締め括りは祭式教室の大掃除。

教員が率先して雑巾がけ。総出で隅々までブラッシュ・アップ。祭式教室を清々しくリフレッシュします。

この前後、有志学生が祭式教室の装束備品を点検・補修。観月祭や成人加冠式の装束も、すべて学生諸君がまごころ籠めて繕ってきたものです。

いつも自発的に集い、肅々と作業を遂行してくれる学生諸君。皆さんの気働き、無償の献身に、心からの「ありがとう」を申し上げたいと思います。



# 成人加冠式(二) 祝辞

❀ 第十回成人加冠式祝辞 (平成二十九年  
一月二十一日)

武田 秀章 「神道文化学部長」

本学恒例の成人加冠式も、おかげさまをもちまして今回で第十回目の節目を迎えました。

そもそもこの式典は、今を去る十年前、「新成人を迎えた仲間を、本学ならではの行事でお祝いしよう」という学生たちの思いから始まりました。第一回目の新成人はごく少人数で、本当に内輪の「家族の行事」のように始まったのです。

そうしたささやかな行事が、年々拡大の一途を辿り、さながら「大家族の行事」「一族の行事」へと成長しました。けれども「仲間の慶事を、まごころ籠めてお祝いしよう」という成人加冠式の素志は、いささかも変わるところはありません。

神道の古典、『古事記』では、神々が幾多の試練を経て生まれ変わる物語が語られています。新成人の皆さんが、これから直面することになるであろう試練を乗り越え、「立派な大人」へと生まれ変わることを祈念して、学部長よりの祝辞とさせていただきます。本日はまことにおめでとございました。



# 成人加冠式(二) 新成人のメッセージ

## 喜びと感謝と

中村花野さん 「神道文化学部三年生」

第十回成人加冠式で、新成人として参列させていただきました。

前回・第九回のこの式典では、「前導・祓主」として奉仕し、先輩方のご多幸を祈念させていただきました。その時から、自分が新成人として参列できる日を待ち遠しく思っていました。

当日は、天気にも恵まれ、素晴らしい青空のもと、晴れの式典に臨むことができました。加冠役の先生から額当を授けていただいた時、「これからはもう大人の仲間入りなのだ」という思いが、ひしひしと込み上げてきました。

特に感銘深かったのは、いつもお世話になっていた先輩の舞を目の当たりにした時でした。その舞姿の美しさ…。思わず胸が熱くなるのを感じました。

この日のためにご尽力くださった先生方、職員の方々、先輩後輩、遠方から駆けつけてくれた両親…。「お世話になった方々に、少しでも恩返しができるよう、精一杯励んでいかねばならない」。そう決意を新たにしました。

この式典に関わってくださった全ての方々、「私の二十年間」に関わってくださった全ての皆様方に、この場を借りて心より御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



# 成人加冠式(三) 衣紋方のメッセーじ

## ❀ 私たちの「恩返し」

川元 日菜子さん 「神道文化学部四年生」

新成人の皆様、おめでとうございます。國學院大學ならではの成人加冠式、楽しんでいただけたでしょうか。

私は萌黄會の衣紋方として、主に女子の装束の着装を担当しました。女子の装束は、鮮やかな襲と美しい文様が特徴です。式典での緊張した面持ち。御両親との記念撮影での満面の笑み…。新成人の皆様のかげがえない思い出を彩る装束を、責任持って扱わせていただきました。

私は昨年、新成人代表を務めさせていただきました。先輩方の丁寧な着装に感じた憧れと感謝の思いは、決して忘れることはできません。今回、衣紋方を務めさせていただくに当たって、いかにその「恩返し」が出来るかを胸に刻み、お稽古や諸準備に臨ませていただきました。

成人加冠式では、式典は勿論のこと、私たち先輩が、後輩の新成人をどのように「お祝い」するかということが大切だと思います。晴れの式典に臨む後輩たち。その装いを整える私達先輩の責務は、とても重大です。

試験期間前後の慌ただしい折柄、私たちは皆一丸となって、精一杯の加冠式を作り上げることができたと思っています。昨年、先生方や先輩方が作り上げてくださった「最高の加冠式」への「恩返し」を、いささかなりとも果たすことができましたのではないのでしょうか。

新成人の皆さんにお願いがあります。来年の成人加冠式は、今回の感謝の気持ちを胸に、ぜひ皆さんが中心となって作り上げて行って下さい。

本学ならではの成人加冠式が、「おめでとう」「ありがとう」のまごころを繋ぐ行事として、未永く受け継がれていくことを、心から祈っています。





佳作

今橋 晶子さん [神道文化学部一年生]  
【大国主神と白兔】



坂本 和香さん [神道文化学部一年生]  
【日本列島神々絵巻】



川元 日菜子さん  
[神道文化学部四年生]  
【大国主神】

入選



吉田 晴香さん  
[神道文化学部二年生]  
【天沼矛】



特選 新井 麻美さん [神道文化学部一年生]  
【古事記との出会い】

## 古事記アートコンテスト

平成二十九年度から始まった古事記アートコンテスト（國學院大學古事記学ゼンター・一般財団法人神道文化会共催）。コンテストには、全国から一七点の作品が応募。

その中から、五名の神道文化学部生が表彰の栄に浴しました。いずれも制作者の「古事記愛」が漲る珠玉の力作です。

「子供の頃の『古事記』との出会いを思い出しながら描きました。私と同じように、たくさんの子供たちが『古事記』と出会うことを祈っています」（特選）新井麻美さん談

『古事記』アートコンテストは引き続き平成三十年度も開催されます。学部生の積極的なチャレンジを期待して已みません。

# 「米作り」

## 田植え — お米作りワークショップ —

### ※ すべて手作業の稲作り

宮本 康平さん 「神道文化学部」二年生

一般社団法人心游舎と本学の共催による「お米作りワークショップ」。私は六月の田植え、十月の稲刈りと、二回参加させていただきました。私は青森県の家の出身です。二日間という短い日程の中で、将来のご奉仕の指針となるような、充実した体験をさせていただきました。

六月の田植えでは、初日に、地元農家の方々から地元の農業の歴史をお話しいただきました。二日目は、福島鴻を散策したのち、田んぼで田植え作業を行いました。暑い日差し、泥の中の独特な感覚……。あたかも五感が呼び醒まされるような、とても新鮮な経験でした。

十月の稲刈り初日に際しては、彬子女王殿下よりご講演を賜りました。かつて米作りの指針であった二十四節気を巡るお話で、日本の歴史の中心にお米があることを、しっかりと胸に刻ませていただきました。

二日目はいよいよ稲刈り。私たちが植えた稲に、たわわの穂が稔っていました。感動の余り思わず「おお！」と声をあげてしまいました。

今回お世話になった農家さんは、「自然栽培」でお米を作っています。「自然栽培」では、農薬や化学肥料などを一切使わず、全てを手作業で行います。まさに自然に寄り添った栽培法です。現在主流となっている農薬や農業機械を用いた栽培法とは逆行した栽培法ともいえます。

もちろん手作業ですから、時間も手間もかかります。けれども私たちは、こうした栽培法だからこそ、お米一粒一粒の貴重さを、じっくりと学ぶことができたのだと思っています。

農家さんたちは、一本一本の稲に真剣に向き合い、愛情を持って育てておられ

ました。このような学びを体験することが出来たのも、地元農家の方々の親身なご配慮、本企画をご発案いただいた彬子女王殿下の格別のご高配の賜物と存じております。まことにありがとうございます。



## 稲刈り ―田んぼ学校―

❀ 子供たちに伝える「お米の大切さ」

リュウ・サイモンさん 「神道文化学部三年生」

昨年十月、私は日本文化興隆財団主催「田んぼ学校」の稲刈り体験に、ボランティアとして参加させていただきました。当日午前、埼玉県の高宮神社に到着。高宮神社宮司で本学教授の茂木貞純先生のご奉仕により、開講奉告祭が行われました。

田んぼに到着するや、まず茂木先生が修祓を行いました。いよいよ稲刈り開始。引率のヘイヴンズ・ノルマン先生、星野光樹先生も、学生と共に鎌を振ります。稲刈りを終え、神社に戻ると、今度は餅つき体験です。本学の学生たちも、つきたての餅をおいしくいただきました。次に「脱穀・糲摺り体験」及び「精米体験」。収穫後の作業の流れと、お米を食べられる状態にする手間暇が、はじめてわかりました。

ついで収穫奉告祭を斎行。これに先立ち、本学学生ボランティアが、参加の親子に参拝作法（二拝一拍手一拝と玉串奉奠）とその意味を教えました。本学留学生の皆さんも、引率のヘイヴンズ先生から、英語で手水の作法、玉串拝礼の作法を教えてくださいました。

今の時代、人々は稲作の苦労から、すっかり遠ざかってしまいました。そんな中で、田植えと稲刈りの実体験を子供たちにしっかりと伝えることは、とても大切なことだと思います。子供たちは、身をもってお米を大切にすることを学んでいくのではないのでしょうか。

私にとって、田んぼ学校は非常に貴重で有意義な体験でした。神道を志す者として、多くのことを学ばせていただきました。



# 講座

## 御幣講座

### ※ 第一回御幣講座を受講して

吉本 けいとさん 「神道文化学部四年生」

奉職に向けてより実践的な学習を深めたいと考えていたところ、第一回の御幣講座の開催を知り、その場で参加を決めました。

七月に行われた講座の内容は、御幣の歴史の変遷と基本構造を学んだのち、実際に作り方を覚えるという流れでした。

最初は一枚、あるいは三枚の紙と串・紙こぎ紐からどのようにして御幣が作られるのか見当もつきませんでしたが、完成形をイメージしながら手を動かして、ついに見覚えのある形が現れたときはまことに嬉しく感動いたしました。

まずは今回ご指導いただいた二種の基本形がしっかりと身に付くよう、自宅でも少しずつ練習を重ねて参る所存です。院友神職会並びに神道文化学部の先生方には、このように貴重な学びの機会を与えて頂きましたことを心より感謝申し上げます。ありがとうございました。





# 衣紋講座

## ❀ はじめての衣冠着装

上坂 宜嗣さん 「神道文化学部三年生」

十一月の衣紋講座で、はじめて衣冠を着装させていただきました。実際に装着してみて、衣冠ならではの重みを体感いたしました。申すまでもなく、着装の乱れによって、祭事を損なうようなことがあってはなりません。

衣紋者が負う責任の重さもまた、深く痛感させていただいた次第です。先生はこう仰いました。

「着装には、イメージトレーニングが欠かせません。あるべき理想のイメージを思い描きながら、各自着装に当たりましょう」。

今回の講座で、衣冠のあるべき完成像を、身をもって体験させていただくことができました。このたびの御方の経験は、自分が着装する側に立った際に、必ず活かせるものと思っています。

今回学び得たことを、これからの授業はもちろん、将来の奉職先でぜひとも活かしていきたいものと願っています。



# 女子学生のための就職セミナー

❀ 女子学生の就職力アップを！

藤本 頼生 「神道文化学部准教授」

平成二十九年二月、神道文化学部主催の「女子学生のための就職セミナー」(第二回)が開催されました。  
今回のセミナーでは、キャリアサポート課就職アドバイザーの竹内慶子先生と共に、神道文化学部OGとして京都の由緒ある神社に奉職した卒業生、及びわが国有数の「ものづくり」の企業に就職した卒業生をお招きし、種々お話をうかがいました。

続く質疑応答では、在学生の就職・奉職に関わる諸々の悩みが、OGたちからの親身な応答によって、一つずつ解消されていきました。不安を抱える一人ひとりの女子学生に寄りそうなセミナーとなりました。

引き続き、就職アドバイザーの竹内慶子先生から、就職活動で必須となる履歴書の書き方をめぐって、懇切なご指導をいただきました。

神道文化学部では、女子学生の就職力アップ、就職・奉職にかかわる迷いや疑問を解消するための企画を、これからも継続して開催していく予定です。企業は「神道のこころ」を身に付けた女子を求めています。皆さんの目標達成を祈って已みません。



# 復興支援

❀ 被災した方々の心に寄り添えるように

稲山 鈴香さん 「神道文化学部一年生」

毎年五月四日に福島県いわき市久之浜で行われる「四社合同神幸祭」。当日は、下谷神社（東京都台東区鎮座）の阿部明徳宮司のお呼びかけで、子どもたちのための縁日が開かれます。平成二十五年以来、國學院大學の学生も、そのお手伝いをしてきました。入学したばかりの私も、先輩たちに交じって参加させていただきました。

今回、このボランティア活動に携わって、いかに自分の日常が恵まれ過ぎたものだったかを痛感しました。私は、ニュースや新聞報道に接して、東日本大震災のことを理解したつもりになっていました。けれども現地に入ってから、

被災からもう六年も経過しているのに、海岸線一帯には、なお多くの更地が残されていました。この町に津波が容赦なく押し寄せたその傷跡が、至る所に生々しく残されていました。

微力な私ですが、被災した方々の心に少しでも寄り添えるよう、これからもボランティア活動を続けていきたいと思っています。



# 千度大祓

「せんどおおはらえ」



平成二十三年以降、福島県いわき市小名浜の特設斎場で「東日本大震災慰霊鎮魂ならびに復興祈願 千度大祓」（例年七月、いわき大祓の会主催）が斎行されています。この行事は、震災の年、災いを乗り越え、豊かな海・豊かな郷土を取り戻すという趣旨から始まりました。第二回目以降、神道文学部・神道学専攻科等の学生が継続して参加、地元の方々と共に大祓詞十巻を奉唱し、被災地復興を念じています。



❀ 山名浩司さん  
「神道文学部四年生」

今年もこの日が来ました。大学に入学以来、参加し続けている千度大祓。今年で四回目のご奉仕です。参加している神職の方々、地元の方々、神道文学部から来る学生たち…。様々な方々の想いが集まった千度大祓行事だと思っています。

三月十一日の地震は、地元の中学校の卒業式のと、友人たちと懇談している時に起こりました。毎年三月十一日が来ると、その時の記憶が鮮明に蘇ります。

私一人の力は微々たるものです。けれども、みんなが力を合わせて一つの方向に向かう時、大きな力が湧いてきます。それが形として現れているのが、千度大祓行事なのだと思っています。

千度大祓は今年で七回目を数えました。「ぜひ十回目まで続けたい」。そう山名支部長が仰っていました。何としても十回目まで繋いでいき、ふるさと復興の力になりたいものと願っています。



# 国際協力

## Experience! Evening of Japanese Culture

(日本文化を体験する夕べ)

✿ 外国の方々とのコミュニケーション

朝比奈 琴音さん 「神道文化学部二年生」

平成二十九年九月、國學院大學博物館で「Experience! Evening of Japanese Culture」が開催されました。外国の方々にも日本文化を体験していただく企画です。当日は、私たち神道文化学部の学生が、雅楽の演奏と装束披露を行いました。私は、外国の方々の装束着装のお手伝いをさせていただきました。

「笏の持ち方」「狩衣」など、通訳の方にも馴染みのないものでしたので、外国の方に伝えるのはとても難しいことでした。けれども、身振り手振りを交えるうちに、どうにか分かっていただけたようです。狩衣と烏帽子を身につけた皆さんの笑顔が、とても素敵でした。外国の方々とのコミュニケーションでは、言語はもちろん、ジェスチャーが大切なことを学ばせていただきました。

来たる東京オリンピックの際には、最高のおもてなしができるよう、これからしっかりと準備していききたいと思っています。



# 卒業

## 卒業生メッセージ

※ かけがえのない「場」

春田 華奈さん 「神道文化学部第二二五期卒」



神道文化学部への進学を考えたのは、高校三年生の時でした。私には姉妹がいるので、学費の負担をなるべく減らしたいと思い、フレックスA（夜間主）への入学を決めました。この四年間、フレックス奨学金の支援を受けながら、昼間は神社の助勤で学費を補い、夕方からは大学に通う日々でした。入学当初、祭式や雅楽を学ぶサークル「瑞玉會」に入りました。それ以来、大学の四季折々の祭事で、祭員や舞人を務めてきました。

一年次、大学行事の観月祭で、神楽舞をご奉仕させていただきました。秋の夜の、あのしみじみとした感動。一期一会の忘れ難い思い出となりました。

二年次、本学恒例の成人加冠式では、新成人代表として誓詞を奉読しました。あの身の震えるような感激を、一生忘れることはないでしょう。

そしていよいよ卒業の年。本学恒例の成人加冠式「祝賀の儀」で、「浦安の舞」を披露させていただきました。四年間、「道の友」として交流を深めてきた親しい友人と一緒に。あたかも大学生活の総括の如く、精一杯のまごころを籠めてご奉仕させていただきました。

神道文化学部に入って最もよかったこと。それは仲間や友人と出会えたことです。全国から神職を目指して集った仲間たち。神道文化学部は、そうした仲間たちと共に切磋琢磨できる、かけがえのない「場」です。神道文化学部ならではの「こころ」が、後輩たちに末永く受け継がれていくことを心から願っています。



# 奉職・就職

## 奉職

❀ 学部での経験が、ご奉仕の支えとなっています

齊藤 美姫子さん 「神道文化学部第一二期卒」

卒業後、女性神職として奉職させていただきました。当初は巫女としての仕事から入り、一年を経て、権禰宜を拝命しました。

とりわけ新生児の初宮詣でご奉仕すると、親御さんからとても喜んでいただけます。いちばん嬉しいのは、報賽に来られた方々の喜びのお顔に接する時です。

御祈願はいつも一期一会です。御祈願の方々のまごころにお応えし、精一杯のまごころを籠めて奉仕させていただきます。

学部での学びが、ご奉仕に役だっていることはもちろんです。さらに私の支え

になっているのは、お神輿サークルでの活動です。

私はこの活動を通じて、全員参加で形作るチームワークの素晴らしさ、皆で心一つにして盛り上がる昂揚感を、いつも満喫してきました。

皆が力を合わせ、困難を乗り越え、目的を達成する…。こうした経験は、神社

のご奉仕だけではなく、一般社会の現場でも、必ず活かしてくるものではないでしょう

か。

先輩神職の方々は、新しい時代のうねりの中で、神社をどう活かし、新たな発展をいかに齎していくか、常に心を砕いています。微力ながら私も、そのお手伝いできればと願っています。



# 式年遷宮奉祝舞

第六十二回神宮式年遷宮

## 奉祝舞「河水久澄」披露

❀ 遷宮奉祝のまごころを籠めて  
精一杯舞わせていただきました

大番彩香さん 「神道文化学部一二期卒業」

平成二十五年、第六十二回神宮式年遷宮に際して、私たちは遷宮奉祝舞「河水久澄」の舞姫をご奉仕させていただきました。

「河水久澄」は、久邇邦昭元神宮大宮司・神社本庁統理が作曲され、豊英秋元宮内庁式部職楽部首席楽長が作舞された奉祝舞です。

同年十一月二十五日開催の全国神社関係者大会（於三重県宮サアリーナ）でのお披露目に向け、私たちは約十ヶ月の間、ひたすら稽古を重ねました。

本番当日は、曲中の御歌にみえる五十鈴川と神路山があらわれた装束を身に纏い、遷宮奉祝のまごころを籠めて、精一杯舞わせていただきました。

神道文化学部に在学していたからこそ、かけがえない思い出です。



写真：神社新報社提供



# 「年中行事絵図」

❀ 「観月祭絵図」「成人加冠式絵図」制作者メッセージ

二宮 昌世さん 「神道文化学部第二二期卒」

私は美術大学を出てから三十年ほどデザイン事務所に勤めてのち早期退職し、神道文化学部三年次に編入学しました。その動機は、デザイン界でしばしば大事なものとして言及される「日本の伝統」とはいったい何なのか、勝手な私感が横行しているだけではないか、という疑問・疑惑を、自分なりに少しでも解いてみたいということでした。

二年間の学びで、当初の疑問について何か人に教授できるようなレベルになっただけではありませんが、『古事記』や『日本書紀』を一行づつ丹念に読んでいくような作業が、私にはとても新鮮かつ刺激的な体験で、それだけでも神道文化学部在籍して良かったと思えます。さらに武田先生のお引き立てにより、学内行事の手描きイラスト制作の機会をいただき、またそのことで学部長賞をお受けすることになったのは、まことに有難く恐縮の極みです。

「日本の伝統」に基づく行事の、若い人たちの現場を取材できたことだけでも貴重な経験になりましたし、写真やCGでは伝わらないことが少しは表現できたことも喜びです。拙作ながら自分の在学の足跡を大学に残せる榮譽に深く感謝いたします。

社会人を十年以上経験して、何か知的に気がかりなことが毎日を苦しくしている場合は、体力が残っているうちに思い切ってもう一度大学に入り直して、体系的な学びを自覚的に再体験すること、今の若い人と同じ身分になって、その熱量をリアルに感じてみることを強くお勧めしたいと、私は思います。



第十回成人加冠式 二〇一七年 一月二十日(日)

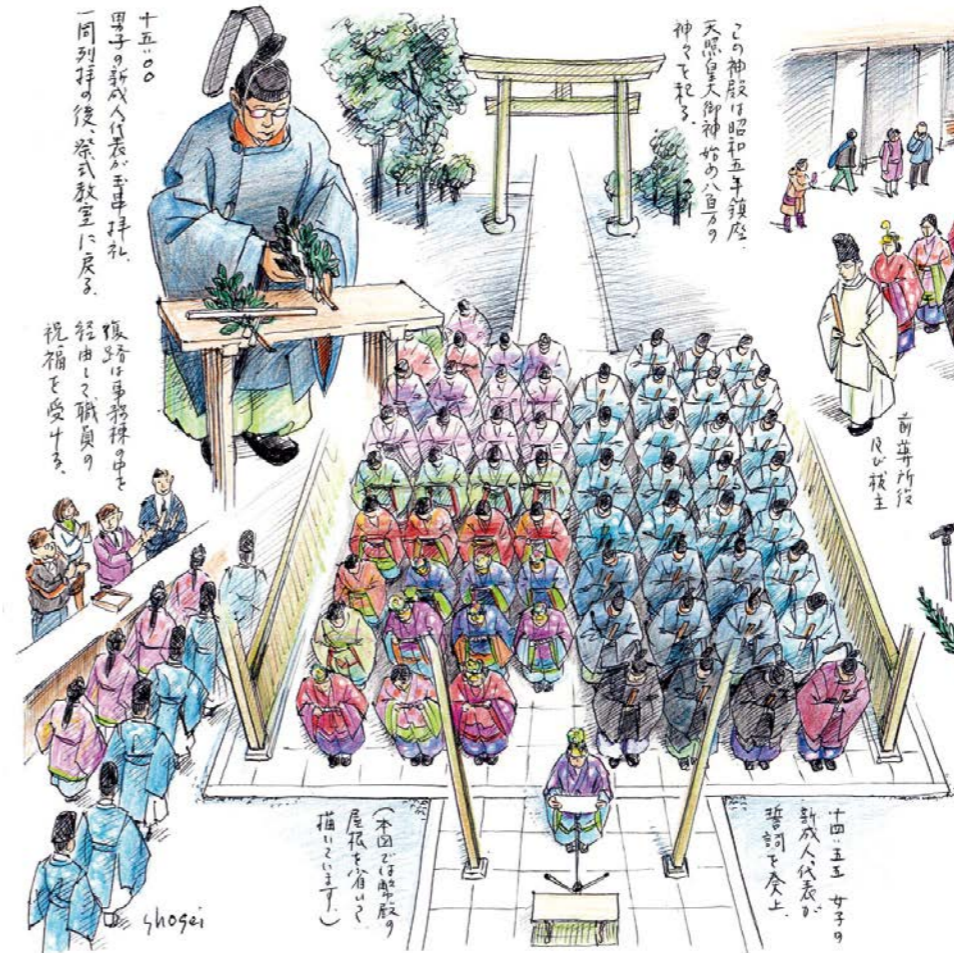
二 神殿儀  
其 大學報告



十四日〇隊列で社へ  
学内の神殿まで参進。  
通りがかりの人達も目  
釘づけにす。

今回〇名が祭員に  
一二年生の参任。  
祭員  
前導役  
氏主

十一三〇  
天気は良いが外は  
風が強い。スタッフは  
看板が倒れないうら  
した。祭場のスタッフで  
大前導役及び主事役取



この神殿は昭和五年鎮座。  
天照皇天御神始め八百〇〇  
神々を祀る。

十五〇〇  
男子の新人代表が主事拝礼。  
一同列拜の後、祭式教室に戻す。  
復習は事務棟の中心  
経由して職員より  
祝福を授けらる。

十四五五 女子の  
新人代表が  
誓詞を奏上。

(本日は加冠式)  
尾振を看取り  
描いていただきます。

shogei

第十回成人加冠式 二〇一七年 一月二十日(日)

三 儀  
其 祝賀



十五二〇  
左のり  
えん  
振鉾  
(清めり舞)

動画を見る  
寫字を確認

十五二二五  
豊栄茶会  
八尾より参拜

十五三〇 新人代表が主事役取  
加冠式の締めくくりは、  
上級生の舞による推杯  
祝いの舞。

十五三三五  
浦安舞  
(平和祈り舞)

奏楽には  
和琴も加わった。

閉会後記念撮影大会。

せしむすけ、並見だけてはぐにない。

shogei



國學院大学 神道文化学部  
第七回 観月祭 二〇一六年  
十月十五日(三)

神宮の舞は昭和十五年の皇紀二千六百年  
奉祝祭に合わせ創出された神楽舞。  
昭和天皇の御製が歌詞の平和を祈念する。

十六四五 鈴の鋪設

女子力による神事



天地の神にぞ祈る朝の日の  
海のほとくに波たたぬ世を

共三 浦安の舞

十六四七  
舞台神の斎庭係が出演  
する舞人の裾を来身く  
れせ入る。



十六四五〇 本番



十二四〇  
行儀する斎庭係の面々

著せる先生の浅踏  
これ下履のほ舞台袖



Shogai



十三四〇 八は終るも古に息を出入る  
伶人も女子力と云え  
水くま



十五一五  
会場案内係  
三度也ハラスキ



十六四〇 雨渡  
白衣白袴の宇真理も本番モード

國學院大学 神道文化学部  
第七回 観月祭 二〇一六年  
十月十五日(三)

振鉞は、中国古代の戦勝祈願の故事  
にちなむとされ、舞樂の始りにあたり  
舞台を正月めく理の演目、テンションの高い  
当日は左方、舞のソロで披露された。

共四 振鉞

② 次に糸鞋を履く  
結び方が難しい

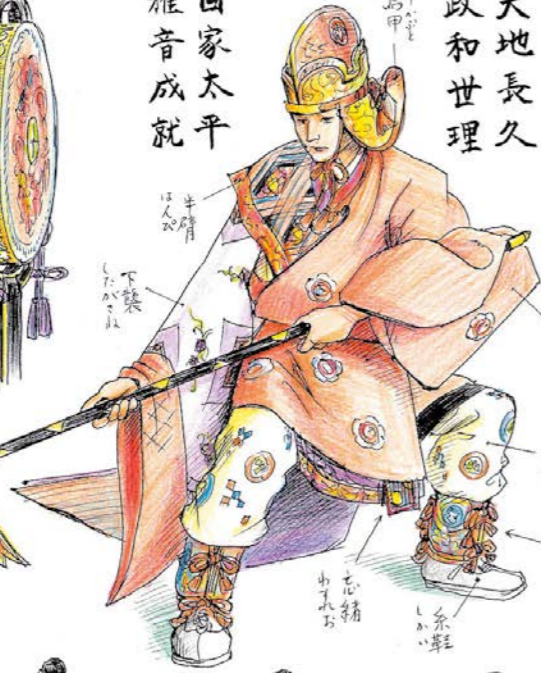
③ 朝掛はもう一人自身  
ごは付けられたい

十三一五  
著装並列の  
一人様朝掛



天地長久  
政和世理

國家太平  
雅音成就



④ 下襲を着る  
後ろに袂は柄の  
上に帯を巻く



① 半臂と志緒を  
つける

⑤ 裾につけ石帯と袴の  
片肩紐とする  
(裾のけり着座の後志緒)



十七一五 本番  
伴奏は乱声と呼ばれ  
る一種の無調音楽  
で、一人と大太鼓の  
協演に軸がある。



十五一〇

Shogai



四月は入学式の季節である。当年は、あいにくと三月中をもって桜の花は散り果て、異例の「若葉の候」の入学シーズンとなった。私が勤務する國學院大學においても、去る四月五日、多数の新生を迎えて盛大な入学式がおこなわれた。もとより、新発足した神道文化学部が迎えた一回目の入学式である。

式典終了後、私たち教員は、新生諸君を招集して学部ガイダンスを実施した。会場には、この新学部を敢えて選択し、ここに一度限りの青春を賭けようという二百四十一名の若者たちが、一堂に会したのである。

顧みれば、新学部発足に至る産みの苦しみたるや、まことに語り尽くせぬものがあった。新学部の在り方を巡つての果てしない激論、内外のさまざまな説得と調整、連日深夜に及ぶ申請書類作り……。いくつもの越え難き山を越え、いくつもの渡り難き川を渡り、天佑神助を得て、辛くも神道文化学部設置に至り得た、というのが、ありのままの実情に近い。それだけに、かくも多くの新生たちを、実際に目の当たりにし得たこの日の感激も、また一入のものがあつたのである。



さっそく翌日から、渋谷・たまプラーザ両キャンパスに設けた相談室に詰め、新入生の履修上・勉強上の相談に応ずることとなった。この間、入室する諸君と膝を交えて大学での勉強の仕方如何を語り合うと共に、科目の履修・時間割の組み方等についての質疑に答えていった。こうして新入生と親しく接するうち、いつしか私は、彼らの裡に、過ぎし日の自分の姿、田舎出の新生に過ぎなかつた自分自身の姿を見るような思いがしてきた。私はしばしば、二十数年前の自分に、頑張れ、頑張れ、と呼びかけているような錯覚にとらわれた。

オリエンテーション期間を経て、十二日から、いよいよ授業が始まった。初回の授業において、私は、学生たちに饒のエールを贈つたのち、最初のミニレポートとして、各々の新学部への期待、各々の抱負を書いてもらった。中でも、「講

義はまだ一巡していませんが、この学部を選んだのは決して間違ひではなかつたと感じ始めています」との女子学生のメッセージが、何よりも嬉しかった。



今、私は、新生諸君と共に『古事記』の講読を進めている。教師が本気で語りかけなければ、絶対に学生の心には届かない、というのが、私の教員生活の経験則である。

私の見果てぬ夢は、彼らの若くみずみずしい心に炎を点すこと、晩年の真淵が若き宣長の心に点したような、生涯燃え続ける炎を点すことである。国学の心は、そのようにして受け継がれて来たと信ずるからである。

ともかくも、新学部に身を投じた学生諸君を、決して失望させるようなことがあつてはならない。四年後の完成年度を迎え、誇り高き第一期卒業生を社会に送り出すその日まで、何としても彼らを育て上げてゆかなければならない。やがて神道文化学部が教育機関として確立し、研究機関としての大学院と連携しつつ、國學院と皇學館以外、他のどこにも存在しない、神社神道・日本文化の教育・研究センターとして内外に重きをなすに至るその日まで、日々の研鑽を怠ることがあつてはならない。

ここで踏み出したささやかな一歩が、国学先人の学びの道をしつかりと受け継ぎ、遠大な修理固成の道筋へと連なるものであることを、今はただ祈るばかりである。



# 神道文化学部の歩み

平成 12 (2000) 年	2月 12月	理事会、創立 120 周年記念事業として神道系新学部の開設を決定 全学教授会、文学部神道学科の神道文化学部への改組転換を承認
13 (2001) 年	4月 6月 8月	「学校法人國學院大學寄附行為変更認可申請書」を文部科学大臣宛に提出 神社本庁、「神職養成機関に関する規程」を改正 文部科学大臣、神道文化学部の設置認可
14 (2002) 年	2月 4月 9月 12月	渋谷キャンパス再開着工 神道文化学部神道文化学科開設 学部長に安蘇谷正彦教授、副学部長に阪本是丸教授就任 國學院大學院友神職会発足 創立 120 周年記念シンポジウム「神道文化」を考える」開催（神道宗教学会主催）
15 (2003) 年	3月	120 周年記念 1 号館竣工
16 (2004) 年	4月 7月	岡田莊司教授が学部長就任、安蘇谷正彦教授は学長就任 120 周年記念 2 号館竣工、祭式教室収容
18 (2006) 年	3月 4月 6月	神道文化学部第 1 期卒業 カリキュラム改定、「明階総合課程」開設 若木タワー竣工、教員研究室・資料室を 16・17 階、資料室分室を 8 階に収容
19 (2007) 年	4月	石井研士教授、副学部長に就任
20 (2008) 年	1月 3月	第 1 回成人加冠式斎行 学術メディアセンター（AMC）竣工、図書館収容



平成 21 (2009) 年	4月 9月	学部長に石井研士教授、副学部長に大原康男教授就任 3 号館竣工、渋谷キャンパス再開（1 次）完成
22 (2010) 年	10月	第 1 回観月祭斎行
23 (2011) 年	3月 4月	東日本大震災に伴い卒業式中止 カリキュラム改定、神職課程必修科目変更 東日本大震災に伴い入学式中止
24 (2012) 年	2月 7月	「書道講座」初開催 「和歌講座」初開催
25 (2013) 年	2月 4月	創立 130 周年記念・神道文化学部開設 10 周年記念シンポジウム開催 武田秀章教授、副学部長就任
26 (2014) 年	1月 2月 4月	「神道文化学部学部長賞」創設 「就職活動のためのマナー講座」初開催 「國學院大學神道文化学部神職子女奨学金」導入 渋谷キャンパス及び明治神宮にて新入生対象「アイスブレイク」初開催
27 (2015) 年	4月 11月	学部長に武田秀章教授、副学部長に西岡和彦教授就任 カリキュラム改定、神職課程必修科目変更 130 周年記念 5 号館竣工 「衣紋講座」初開催
28 (2016) 年	2月	「女子学生のための就職セミナー」初開催
29 (2017) 年	4月 7月	茂木栄教授、副学部長就任 「御幣講座」初開催



神道文化学部開設 15 周年記念フォトアルバム

## 「神道文化学部の四季」

平成 30 年 3 月 3 日発行

発行所 國學院大學神道文化学部

発行者 神道文化学部長 武田秀章

〒 150-8440 東京都渋谷区東 4 丁目 10 番 28 号

印刷所 加藤文明社

〒 101-0061 東京都千代田区神田三崎町 2-15-6

※教員の職位、学生の学年は平成 29 年度のものです

※写真：神道文化学部教員有志

増山正芳（神道文化学部 3 年生）

※挿絵：二宮昌世（神道文化学部 125 期卒）





もっと日本を。もっと世界へ。

